財団法人 日韓文化交流基金
NEWS
2011.12.28 No. 60

Contents

1-3──**第３期日韓文化交流会議**
第３回全体会議・公開シンポジウム
「創造的な日韓交流の時代へ
―文化コラボレーションの可能性―」
4 ──**基金賞・基金訪韓団**
第12回日韓文化交流基金賞
第27回日韓文化交流基金韓国訪問団
5 ──**基金賞受賞者エッセイ**
私の日韓交流　金順姫
6-7──**青少年交流事業**
日韓姉妹都市交流ユースカップ2011

8-9──**フェロー研究紹介**
物語文学と神々の変貌
―アマテラスの変貌を中心に―
韓正美
10-11―**日韓文化交流基金事業報告**（2011年7月～9月）
12 ──**公募プログラム案内**
人物交流助成・学術定期刊行物助成のご案内

http://www.jkcf.or.jp
財団法人日韓文化交流基金
The Japan-Korea Cultural Foundation
〒105-0001 東京都港区虎ノ門５丁目12番１号 虎ノ門ワイコービル4F
Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

第3期 日韓文化交流会議
第3回 全体会議・公開シンポジウム
「創造的な日韓交流の時代へ ―文化コラボレーションの可能性―」

日韓文化交流会議は、9月28、29日の両日、京都で「第３回全体会議」と公開シンポジウムを開催しました。
全体会議では、第２回全体会議に続き「国民的レベルの文化交流の拡大」という主題の下に意見交換を行い、来年春に両国政府に提出予定の提言作成に向けて議論を進めました。また、今回は、各委員がそれぞれの専門分野別に３つの小グループに分かれて分科会合を開きました。
立命館大学の協力を得て開催したシンポジウムにおいては、「創造的な日韓交流の時代へ」とのテーマの下、多数のフロア参加者が見守る中、両国委員長の基調報告と委員によるパネルディスカッション、大学院生による報告などが行われました。

全体会議

第3期日韓・韓日文化交流会議メンバー

◆日本側メンバー

委員長	川口　清史	学校法人立命館総長･立命館大学長
	有川　節夫	九州大学総長
	市川　森一＊	作家、脚本家
	小倉　紀蔵	京都大学准教授
	川淵　三郎	日本サッカー協会名誉会長
	木村　典子	日韓舞台芸術コーディネーター
	倉本　裕基	作曲家、ピアニスト
	小針　進	静岡県立大学教授
	辻原　登	作家、東海大学教授
	寺脇　研	映画評論家、京都造形芸術大学教授
	山村　浩二	アニメーション作家、東京藝術大学教授
事務局長	内田　富夫	日韓文化交流基金理事長

◆韓国側メンバー

委員長	鄭 求 宗	東西大学校国際学部教授兼日本研究センター所長
	鞠 守 鎬	ディディ舞踏団長
	金 亨 駿	CJ E&M映画事業部門企画担当顧問
	南 宮 演	音楽家、Studio FAT代表
	朴 晟 源	韓国芸術綜合学校美術院造形芸術科副教授
	朴 銓 烈	中央大学校日語日文学科教授
	孫 正 禹	韓国演劇演出家協会会長
	鄭 起 泳	NEOWIZ GAMES副社長
	鄭 梨 賢	小説家
	崔 鍾 日	韓国アニメーション制作者協会会長
	崔 泰 枝	国立バレエ団団長
事務局長	李 康 民	漢陽大学校教授

＊市川委員は12月10日に逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

日韓文化交流会議 公開シンポジウム

創造的な日韓交流の時代へ ―

基調講演

川口清史日本側委員長

「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」(1998年)以降の韓国での日本大衆文化段階的開放措置により本格的に始まった日韓の文化の相互理解は、2002年のサッカーW杯共同開催を契機とした日本の韓国認識の変化と韓流ブーム到来を経て、2000年代半ば以降は韓国経済の急激な発展による日韓経済関係の変化や韓国スポーツ選手の活躍などにより、日本では韓国の強さがさまざまなレベルで語られるようになった。

このような動きを踏まえ、日韓の文化交流は今後どのように進んでいくべきか。まず、若者交流については、「キャンパスアジア」構想が注目される。日本、韓国、中国の大学間で、互いの国の学生が留学中に取得した単位を本国でも認定しようという制度であるが、現状では日本から韓国への留学生数が韓国から日本への留学生に比べて極めて少なく、東アジアでの学生交流の活性化が期待される。

また今後、多様な主体による多重的交流・融合・協働を進めていくことが必要ではないか。日韓間では、エンターテインメント、スポーツの分野が商業的に成功しており、大衆的な広がりを持つという面でも重要な意味を持つ。他方、芸術、学術、地域文化、教員市民活動など、商業的に成り立たない分野では、NPOや学校などの組織・団体が主体となって、自発的に交流を進めていく必要があるだろう。政府レベルでは、これらを推進するために諸規制の撤廃等の支援が望まれ、我々の会議でもその必要性を提言していきたい。

日韓の交流から協働へ、そして協働から生まれる新たな創造に期待したい。

鄭求宗韓国側委員長

1998年以降の日韓両国の文化は海峡を越えた行き来を積み重ねてきた。現在ではあらゆる分野において膨大な規模の文化交流が実現し、多くの作品、アーティスト、作家が両国で時差をおかずに人気を博している。また、両国の文化が「ハイブリッド化」する現象が現れている。このような動きの背景には、両国でかつては欧米にだけ向かっていた文化的関心がアジアに向かっていることを指摘できよう。また、第1期日韓文化交流会議(1999 - 2002年)の「日韓文化交流に関する宣言(ソウル宣言)」で述べられているように、自由民主主義と資本主義という体制を共有する両国が、「意識」の共有に至り、文化の面においては「趣向の共有」現象が起きているとも言えるのではないか。

今後の日韓関係をより強固なものとしていくためには、引き続き文化の側面からのアプローチが理想的であろう。一例として、ソウルと東京で毎年開催されている「日韓交流おまつり」では、両国のお祭りの文化を合わせた新たな文化コンテンツも登場している。このように、日韓の文化交流は既にハイブリッドの段階を超え、一緒に何かを作り上げていくコラボレーションの可能性を模索すべき時期を迎えている。その際にはグローバル・スタンダードを念頭に置いた規制の緩和、諸制度の整備など、政府レベルでの戦略的提携が必要であろうし、また、NPOやNGO等の市民ネットワーク組織の果たす役割には、より大きなものがあるだろう。

韓国と日本の文化交流を基盤に、将来的には中国も視野に入れ、東アジアの文化交流回廊が実現することを期待したい。

第3回日韓文化交流会議日程

◆全体会議
「国民的レベルの文化交流の拡大」

9月28日(水)16:00～18:00
9月29日(木)9:30～11:30
会場：京都全日空ホテル

第1部　挨拶、主題発表
第2部　小グループ会合
第3部　小グループ会合結果報告

◆シンポジウム
「創造的な日韓交流の時代へ―文化的コラボレーションの可能性―」

9月29日(木)13:30～17:40
会場：立命館大学創思館カンファレンスルーム
司会：小倉紀蔵委員

両国委員長による基調講演
パネリスト冒頭発言
パネルディスカッション

文化コラボレーションの可能性

パネリストの発言

●市川森一委員

日韓のTVドラマの交流は娯楽性の高い作品がほとんどだったが、ドラマは本来人間の心の深層を描き出す力を持つものであり、芸術性の高いドラマが日韓の間を行き来すべき時期に来ているのではないか。両国政府がドラマコンクールを共催し、韓国人の「恨」や「気」、日本人の「恥」や「粋」といった精神構造の理解に役立つ良質のドラマが競い合う場を設けてはどうか。人間性を追求した質の高いドラマには、登場人物の個性にその国の精神土壌や歴史性が内包されている。受賞作品の放映や内容に関するシンポジウムなどにより、さらなる問題提起と相互理解を深めることもできよう。

●鞠守鎬委員

自分は1982年に日本の国立劇場が主催する和太鼓の公演に招待され、それをヒントに「太鼓の大合奏」という舞踊を創作した。この作品はこれまで100カ国で公演を行い好評を得ているが、日本の伝統文化を取り入れつつ韓国の舞踊を作り上げたわけである。

ところで、日韓両国の文化交流には一つ大きな課題がある。今まで会議やシンポジウムで言及されてきたのは、若い世代が対象の分野だった。しかし、日韓では高齢化が急速に進んでおり、文化・芸術に携わる人々は、中高年のためにどのような文化を創り出していくべきか、「中高年の日韓文化交流」を大きな課題として考えていくべきではないか。

●木村典子委員

1970年代に始まった日韓演劇交流は、今やさらに創造的で質の高いコラボレーションを目指す時期を迎えている。しかし、ヨーロッパや東南アジアの事例に比べると、東アジアの日韓中の場合にはまだ〈交流〉という次元にとどまっている。現在日本の新国立劇場と韓国の国立劇団が交流協定締結の準備を進めているが、今後の演劇コラボレーションには両国の国立・公共機関の長期的視点に基づく試みが大きな役割を果たすだろう。また、若い世代が舞台で交流するとともに自分たちが共有している問題を話しあい、共同作業を行える場を作ることも必要だろう。

●金亨駿委員

前回のソウルでのシンポジウムの際、この10年間に自分がかかわった日韓の共同制作作品の中で、商業的に成功した映画は一本もないと申し上げた。日韓の映画界はいずれも現在停滞しており、他国とのコラボレーションは、生き残りのために必要な手段となりつつある。日韓の場合には、既に互いに多くのものを学びあっており、交流の土壌が出来上がっている。また、お互いの市場の重要性も認識しているため、このように蓄積されたノウハウに基づいてコラボレーションが一層進むことを期待したい。また、国からの支援、環境整備にも期待したい。

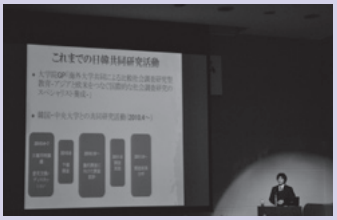
左から小倉紀蔵委員（司会）、市川森一委員、鞠守鎬委員、木村典子委員、金亨駿委員、寺脇研委員、孫正禹委員

●寺脇研委員

現在日韓両国の映画をめぐる状況はあまりよくないが、日韓双方でそろそろ新たな転機が訪れるのではないか。自分は東日本大震災の後、考え方が大きく変わった。第一に「文化至上主義」である。「商業的に成り立つこと」を前提にするのではなく、「良い映画を作り、事後に採算を合わせることを考える」方向に転換すべきだ。第二に「人に頼らない」ということ。政府や企業からの支援を期待せず、自分たちの力で作っていくことで、作りたいものを自由に作ることが出来る。第三に「若い人たちに期待する」ということ。震災の被災地でも活躍しているのは若者たちである。今後の日韓映画交流・文化交流でもこのような視点から取り組んでいきたい。

●孫正禹委員

アジアの公演芸術の文化的価値を再発掘するため、韓国では2005年から「アジア演出家ワークショップ」を実施している。アジア各国から演出家を韓国に招き、約6週間の滞在期間中に韓国の俳優・スタッフと共に作品を完成させるというイベントで、高いレベルの作品を創り出すとともに、アジアの若手演劇関係者の人的ネットワークの形成にも貢献している。このような試みは、独創的で多様なアジアの公演芸術の伝統的技法を、アジアの演劇関係者が現代的な感覚で再創造する大変意義深いものである。今後、同様の取り組みが続けられ、さらに拡大されていくよう政府レベルでの支援を期待したい。



シンポジウムの日程の合間に、立命館大学大学院の日本人学生と京都造形芸術大学大学院の韓国人留学生によるコラボレーション経験に基づく報告と、立命館大学・立命館アジア太平洋大学の学生による和太鼓とサムルノリの合同パフォーマンスが披露されました。

第12回日韓文化交流基金賞

表彰式の様子

日韓文化交流基金では、文化・学術分野における日韓間の友好親善に寄与した韓国の方々の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、以来毎年1回、日韓文化交流基金が韓国を訪問の機会に表彰を行っています。今回の受賞者は、金順姫氏、鮮于鉦氏、申惠璟氏の三氏に決定し、授賞式は9月15日にソウルのロッテホテルで開かれました。

受賞者プロフィール

金順姫（キム・スンヒ）
1941年生まれ
翻訳家、前梨花女子大学校通訳翻訳大学院韓日科兼任教授
1980年代より韓国内の大学で日本の古典文学教育に携わり、大学院の授業では日本舞踊や三味線なども取り入れる等、日本の伝統文化芸能の紹介にも尽力しました。また日韓それぞれの文学作品を数多く翻訳・出版しています。

鮮于鉦（ソヌ・ジョン）
1967年生まれ
朝鮮日報編集局産業部次長
東京特派員として5年半の間日本社会、日本人に対する分析記事を発信し、特に経済分野では日本経済の底力や問題点を明らかにし、韓国社会への教訓として伝えてきました。東日本大震災の後には数回にわたって現地を取材しています。

申惠璟（シン・ヘギョン）
1946年生まれ
西江大学校文学部日本学主任教授
30年間にわたり日本学の発展、日本文化の紹介と日本に対する理解促進に大きく貢献しています。本年5月の西江大学校の日本文化学科の開設に中心的な役割を果たし、6月には「韓日文化フォーラム」を設立しました。

第27回日韓文化交流基金韓国訪問団

日韓文化交流基金の役員からなる韓国訪問団が9月14日から16日までの3日間、韓国を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする関係者や牟喆敏（モ・チョルミン）文化体育観光部第1次官、朴錫煥（パク・ソクファン）外交通商部第1次官への表敬訪問、日韓文化交流基金賞の授与、フェローシップ経験者との懇談、江華島の見学などを行いました。

＜参加者＞

団　長	鮫島　章男	当基金会長、太平洋セメント（株）相談役
副団長	内田　富夫	当基金理事長
顧　問	戸塚　進也	当基金常任理事、前掛川市長、元衆議院議員
顧　問	饗庭　孝典	当基金評議員、東アジア近代史学会副会長
団　員	楢﨑　正博	当基金理事、前関電産業（株）相談役
団　員	大竹　洋子	当基金評議員、東京国際女性映画祭ディレクター

朴錫煥外交通商部第１次官への表敬訪問

私の日韓交流

翻訳家、前梨花女子大学校通訳翻訳大学院韓日科兼任教授　金 順 姫

80年代初めに韓国の大学で日本の古典文学の講義を始めたのが、私が韓国で日本を紹介する契機になった。主に平安文学の概略的な内容ではあったが、思いのほか学生たちが興味を示してくれたのが何よりの励みとなり、楽しく授業できたことが今でも鮮明に思い出される。

80年、90年代は韓国にとって激動の時代と言っていいほど政治的に文化的に大きな変化をみせた時期であった。電車やバスの中で日本の書物を読むのが憚られ、日本の歌を公には歌えなかった時期から、文化開放でどっと日本の文化が韓国に押し寄せてきた時期である。文学においては村上春樹が韓国の若者の共感を呼び起こし、日本の大衆文化が韓国の人たちの間で楽しまれた。そこで日本語学習の熱も高まり、日本語の受講者が増え、授業も古典文学より現代の日本語を教えることに追われることになった。学生たちはアニメやポップス、映画を楽しむために日本語を学ぼうとする傾向が強く、日本の自然と文化の中で育った私としては何か物足りなさを感じ始めた。一方、最近では日本でも韓流ブームが起こり、ドラマ・映画・食べ物など、韓国に住んでいる私より日本の友人の方が詳しく知っているのに驚かされたりもする。もちろん、さまざまな文化を媒体にして両国が知り合うことは喜ばしいことであり重要なことである。知らないより知ることがいかに大切か、日本文化が閉ざされていた時期を経験した私にとって身に染みて有難く思うところである。

●

通訳翻訳大学院で授業をしながら痛感したことは、学生たちの言葉の読みの浅さであった。通訳翻訳において日本語と韓国語は言葉の順序や漢語などに共通した部分があるため、直訳しがちになる。しかし、日本の文化、韓国の文化を十分に理解していないと言葉の持つ深さ、意義が取り違えられるだけでなく誤解を招くことにもなりかねない。特に、日本語は言葉の奥に隠された深い情趣がある。そこで思いついたのが日本の伝統芸能を紹介することであった。2000年代になると、歌舞伎、能、人形浄瑠璃、狂言が韓国で上演されたので学生たちと一緒に足を運んだ。日本古典芸能を知識としてだけでなく実際に体験してもらいたいと思い、学生にソウルの日本大使館広報文化院で開かれている日本舞踊や三味線の講座に参加してもらった。一方で、日本から来た留学生たちの中には韓国のタルチュム、パンソリなどを体験する者もいて、授業の中で互いの感想を話し合い、日韓の理解を深め合うことができたと思う。身近でなかったキモノや三味線、日本舞踊の身振り手振りなどに日本の情緒が感じとれて翻訳をする時、実感がわくというのが学生たちの反応だった。日本舞踊や三味線などで現在も日本大使館広報文化院で主催する発表会や「日韓交流おまつり」の際にもその実力を発揮していると聞いている。日本と韓国の文化を基底にして通訳翻訳で日韓交流に貢献する人たちがどんどん増えていくことを願ってやまない。

民藝研究会の様子

●

退職後、ソウルで民藝研究会を立ち上げた。柳宗悦による「民藝」運動の紹介を通して日韓の理解を深めていくことが目的である。日韓の通訳翻訳の仕事に携わっている先生たちと一緒に『柳宗悦コレクション』を翻訳して韓国で出版することが研究会の初仕事である。日韓の不幸な時代に韓国の民藝に美を見つけ、日本だけでなく世界に知らしめることに献身した柳宗悦の著書を韓国で出版することが日韓交流の原点の一つになると確信している。

●

韓国人の血を継ぎ、日本で生まれ育った私は二つの祖国を持っている。日本の自然と文化の中で育まれたことに感謝し、韓国の血を受け継いだことに誇りを持っている私にできることは、両国の真の相互理解に貢献することだと思う。日韓文化交流基金賞の受賞は改めてこの決心を固めさせてくれた。これから与えられた時間を日韓の文化交流に捧げたいと切望してやまない。紙面を借りて日韓文化交流基金の関係者の皆様に心から御礼申し上げたい。

日韓文化交流基金賞授賞式にて

Profile

金 順 姫（キム・スンヒ）

日本で生まれ育ち、1964年関西学院大学文学部卒業後に渡韓。1983年から世宗大学校、高麗大学校、中央大学校、ソウル大学校、韓国外国語大学校通訳翻訳大学院などで講師を務める。梨花女子大学校通訳翻訳大学院韓日科兼任教授等を経て、現在、翻訳家として活動中。文学博士（東洋大学）。訳書に『柳宗悦評伝　美学的アナキスト』（暁享出版社、2005年、原書は『柳宗悦　時代と思想』中見真理、東京大学出版会、2003年）、『無所有』（法頂著、2001年、東方出版）、『生の裏面』（李承雨著、2011年、藤原書店）等多数。

青少年交流事業

日韓姉妹都市交流ユースカップ2011

2011年7月22日（金）から8月11日（木）まで「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、今年で3回目となる「日韓姉妹都市交流ユースカップ2011」を実施しました。この事業は、姉妹都市交流関係などを有する日韓の地方自治体間で高校生（8チーム）を対象に派遣・招聘プログラムを実施し、サッカーを通じた交流を行うことで、互いの国や文化への相互理解を深めることを目的としています。
8月8日（月）から10日（水）にかけては、日韓混成の高校生で結成された8チーム約240名が都内に集合し、交流の成果を発表するプレゼンテーション・コンテストおよびサッカーのトーナメント戦を開催しました。これらのイベントの成績に基づき、成立学園高等学校B・慶熙高等学校チームが総合優勝に輝きました。

山梨県立甲府東高・堤川第一高チームと成立学園高A・仁昌高チームの試合

参加チーム（8チーム）相互訪問プログラム

各チームのプログラムは7月下旬に日本側の韓国派遣、8月上旬に韓国側の日本招聘を行いました。サッカーの合同練習や試合、学校訪問、ホームステイ、文化体験などを通して交流を深めました。

- 仙台市（東北学院高等学校）・光州広域市（錦湖高等学校）
- 千葉県（千葉明徳高等学校）・仁川広域市（富平高等学校）
- 東京都（成立学園高等学校A）・ソウル特別市（仁昌高等学校）
- 東京都（成立学園高等学校B）・ソウル特別市（慶熙高等学校）
- 横浜市（横浜市立桜丘高等学校）・仁川広域市（仁川南高等学校）
- 横浜市（横浜隼人高等学校）・仁川広域市（雲峰工業高等学校）
- 山梨県（山梨県立甲府東高等学校）・忠清北道（堤川第一高等学校）
- 神戸市（神戸弘陵学園高等学校）・仁川広域市（仁川大建高等学校）

東北学院高・錦湖高
大宮アルディージャユースとの親善試合（招聘）

横浜市立桜丘高・仁川南高
桜丘高での書道体験（招聘）

成立学園高と仁昌高・慶熙高の夕食交流会（派遣）

プレゼンテーション・コンテスト
8月8日(月)　京王プラザホテル多摩

プレゼンテーションのテーマは、相互訪問のプログラムにおいて、どれだけ交流を深めることができたかを発表する「交流自慢」でした。息の合った歌やダンス、文化体験の実演、震災被災地訪問の紹介など、さまざまな形で工夫を凝らした発表が行われ、サッカーやお互いの気持ちについてより理解が深まった様子がうかがえました。このコンテストは仙台市・光州広域市が1位を獲得しました。

被災地訪問の様子も発表された

サッカー大会(トーナメント)
サッカークリニック
8月9日(火)、10日(水)　味の素スタジアム、アミノバイタルフィールド

2日間にわたるサッカーのトーナメント戦は、真夏の太陽の下で文字通りの熱戦となりました。味の素スタジアムで行われた決勝は、PK戦の末、成立学園高等学校B・慶熙高等学校が接戦を制しました。2日目の試合の合間には、柳想鐵(ユ・サンチョル)氏、松原良香氏、遠藤彰弘氏ら日韓両国の元代表選手によるサッカークリニックも開かれ、テクニックや心構えなど、プロのアドバイスを受ける貴重な時間となりました。

決勝戦に臨む選手たち

柳想鐵元韓国代表によるサッカークリニック

表彰式
8月10日(水)　京王プラザホテル多摩

プレゼンテーション・コンテストと2日間にわたるサッカー大会の結果、総合優勝は成立学園高等学校B・慶熙高等学校チームに決定し、表彰式にて当基金の鮫島章男会長から優勝トロフィーが贈呈されました。また、参加全チームに外務大臣からの賞状が授与されました。参加選手からは「言葉が通じなくても友だちになれたし、いいチームワークもつくれた」「外国でありながら相手国が身近になった。これからも関心を持ち続けたい」といった感想が述べられました。

優勝トロフィーを受け取る成立学園高等学校B・慶熙高等学校チーム

順位	総合点	チーム名
1位	90	東京都(成立学園高B) ソウル特別市(慶熙高)
2位	75	神戸市(神戸弘陵学園高) 仁川広域市(仁川大建高)
3位	56	千葉県(千葉明徳高) 仁川広域市(富平高)
4位	53	東京都(成立学園高A) ソウル特別市(仁昌高)
5位	48	仙台市(東北学院高) 光州広域市(錦湖高)
6位	45	横浜市(横浜隼人高) 仁川広域市(雲峰工業高)
7位	28	横浜市(横浜市立桜丘高) 仁川広域市(仁川南高)
8位	23	山梨県(山梨県立甲府東高) 忠清北道(堤川第一高)

フェロー研究紹介

物語文学と神々の変貌 —— アマテラスの変貌を中心に ——

韓国外国語大学校日本語大学　非常勤講師　韓正美

日本の物語文学の中には多様な神祇信仰が描かれており、これまで各物語における神々の研究は進められてきましたが、上代から中世にまで及ぶ物語文学における神々の変貌の様相の問題はほとんど取り上げられてきませんでした。そこで、本研究は、日本古典文学研究と日本宗教研究という学際的立場に立ち、日本の上代・平安・中世の物語文学の中で神々の言説がどのように変貌しているかを問い、それぞれのテクストの中で神々が具体的にどのように描写されているのか、また、それぞれのテクストの中で神々の役割と位置はどのようなものかを考察しようとするものです。

筆者が「物語文学と神々の変貌」という研究テーマに着目したのは、東京大学の博士論文「『源氏物語』における神祇信仰」（2006年7月）と韓国研究財団（旧韓国学術振興財団）研究助成（2007年12月～2008年11月）による「物語文学と住吉神の変貌」研究がきっかけになったのですが、従来、物語文学と神々の変貌についての研究は、「特集 物語・日記文学にみる信仰」（『国文学 解釈と鑑賞』第57巻第12号、至文堂、1992年12月）・「特集 古典文学と信仰」（『国文学 解釈と鑑賞』第65巻第10号、至文堂、2000年10月）という雑誌特集があるくらいで、依然として未開拓のままであるという現状によります。これらの雑誌特集にしても、物語文学に登場する神々を紹介する程度であり、上代から中世までの物語文学の中で、神々の性格や当時の社会における神祇信仰の意味がどのように描写されているのか、また、物語文学における神祇信仰の役割とはどのようなものか、それがどのように変貌しているのか、という問題まで踏み込んだものではありません。そこで、これまでの研究においてほとんど取り上げられてこなかった「物語文学と神々の変貌」を中心に、神々への信仰が物語の構造や手法として、いかに取り入れられているかということを考察し、具体的にはどのように変貌していくかを明らかにするところに本研究の意義があると思われます。

具体的な研究方法としては、神祇信仰を考えるにあたり、まず必要なのは神々の属性や当時の神々の捉え方についての検証なので、記紀・歴史資料・有職故実書に加えて、神社周辺に伝承されている祭祀・文献資料を読みこなし、それによって物語の基底にある神祇信仰の意義を分析します。そして、当時の信仰の文脈に照らし合わせながら、上代から中世にまで及ぶ物語文学における神々の変貌を、「アマテラス*1」が直接語られている上代から平安時代までの物語*2に限定し、『古事記』『日本書紀』『狭衣物語』を中心にアマテラスの変貌の様相に迫ってみました。

『古事記』『日本書紀』におけるアマテラス

アマテラスとは、いかなる神であったのでしょうか。アマテラスは、『古事記』上巻において、「是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大御神*3」とあり、イザナギが日向の橘の小門の阿波岐原で禊ぎ祓いをし、目を洗った時に成った神ですが、「大御神」という最高の敬称が付されており、最高神として登場していることが分かります。一方、『日本書紀』においてアマテラスは、「是に共に日神を生みたまふ*4」と、イザナギとイザナミの二神が「天下の主たる者」を生もうと相談して生まれた「日神」として登場しています。この日神については、従来「日＝太陽」と考え、アマテラスは太陽神そのものと見なされたり*5、あるいは日を崇拝する氏族・部族の宗教的女君として捉えられたりしていました*6。ともに太陽との関係でアマテラスを解釈している点は一致していると言えますが、ここで注意すべきは、「大御神」という最高神として登場している『古事記』と異なり、『日本書紀』では「日神（太陽の女神）」としての神格を現しており、アマテラスの様相が大きく変貌しているということです。

天の岩戸の物語においてもアマテラスは、『古事記』の中では天地の世界を貫く秩序原理として描かれているのに対して、『日本書紀』の中では崇神としての相貌を呈しています。

また、天孫降臨においても、『古事記』では皇祖神アマテラスが降臨の命令の主体となるのに対し、『日本書紀』では高皇産霊尊（たかみむすひのみこと）を皇祖として立てており、アマテラスが主体となっている『古事記』と異なるのです。

神武天皇の東征において天皇は、自ら「日神の子孫」（『日本書紀』）と明言しており、アマテラスのことを日神として受け止めていることが分かりますが、大和進撃を再開しようとする際は、「我が皇祖天照大神」と言っており、神武天皇にとってアマテラスは「日神」と「皇祖神」の二重神格として認識されていることが窺えます。即ち、日神＝皇祖天照大神という太陽神と皇祖神との神格を同時に考え合わせることによって、神武天皇の東征が最高神としてのアマテラスの加護によって成し遂げられたことを浮き彫りにさせていると言えるのです。

『狭衣物語』におけるアマテラス

このように記紀神話において、大御神・太陽の女神・崇神・皇祖神として変貌を遂げたアマテラスは、平安物語である『狭衣物

*1　「アマテラス」の名称は、「天照神」「天照大神」「天照大御神」「（伊勢）大神宮」などと、テクストによって異なるため、本稿では「アマテラス」と統一することにします。
*2　アマテラスは、『伊勢物語』『源氏物語』『栄花物語』においてはそれに仕える女性である「斎宮」として表出されています［詳しくは、拙稿（2006）「斎宮と『源氏物語』」（『日本研究』28、韓国外国語大学校日本研究所）をご参照下さい］。
*3　神野志隆光他 校注・訳（1997）『古事記』、新編日本古典文学全集 1、小学館、p.53
*4　小島憲之他 校注・訳（1994）『日本書紀』①、新編日本古典文学全集 2、小学館、p.35
*5　直木孝次郎（1971）「伊勢神宮」『神話と歴史』吉川弘文館
*6　井上光貞（1965）「神話から歴史へ」『日本の歴史』Ⅰ、中央公論社

神武天皇【国史絵画「神武天皇御東征」
野田九浦画 / 神宮微古館農業館蔵】

語*7』の中では具体的にどのように描かれているのでしょうか。『狭衣物語』の中でアマテラスは、皇祖神として狭衣の帝位に関わっているのですが、まず、嵯峨院の皇女である伊勢斎宮の女三宮に憑依し、狭衣を帝位に即けるように託宣します。また、過去に立てた皇子誕生の祈願が成就し、狭衣帝はそのお礼参りとして賀茂行幸を行うのですが、その際、賀茂社の神主の言葉に、狭衣の帝位に関連したものとして「天照神」の語が出てきており、ここでもアマテラスの皇祖神としての神格を窺うことができます。そして、嵯峨院も前述のアマテラスの託宣のことを皇位継承の存在として想起しており、ここでもアマテラスの皇祖神としての神位が見られるのです。以上のように、『狭衣物語』においてアマテラスは、狭衣の帝位を促す託宣とその伏線、狭衣帝の御代に関連してのもの、託宣を想起したものと、全て皇位及びその継承に関わっており、皇祖神として機能することによって、新帝即位による新しい秩序を正統化させているのではないかと思われます。

上代・平安の物語文学において変貌するアマテラスの諸相は、これは取りも直さず上代・平安時代に生きた人々のアマテラスに対する認識の多様さを意味すると言えるでしょう。というのも、文学はその時代の反映であり、そこに現れたアマテラスの多様な姿は当時の人々のアマテラス観念の複雑さを示すものに他ならないからです。その意味で、上代・平安の物語文学の言葉を借りて述べられたアマテラス像（大御神・太陽の女神・祟神・皇祖神）は、アマテラスに対する世界観の変容が大きく投影されてのものと言えるのです。

このようなアマテラスの諸相が、さらに中世時代になると、どのように展開していくのでしょうか。今後は、上代のテクストと平安物語におけるアマテラスの変貌に続き、中世の軍記物語である覚一本・延慶本『平家物語』『源平盛衰記』を中心に、それぞれ独自のアマテラス関係記事を取り上げ、各テクストに描かれているアマテラスの言説に注目しつつ、アマテラスの変貌の様相を考察・分析していきたいと思っています。

Profile
韓 正 美（ハン・ジョンミ）
2006年東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化コース博士課程修了、博士（学術）。同年より、韓国外国語大学校日本語大学非常勤講師。

*7 『狭衣物語』は、賀茂関連の描き方とその関係の深さから、この物語の作者が賀茂斎院（六条禖子内親王）に仕える宣旨（源頼国女）と伝えられており（三谷栄一 他校注（1965）『狭衣物語』日本古典文学大系 79、岩波書店）、寛弘（1004-1053）の頃より三、四十年後か、あるいは永承（1046-1053）頃から白河朝（1072-1086）の頃の成立かとされる物語で（日本古典文学大辞典編集委員会（1983）『日本古典文学大辞典』、岩波書店）、恋の尽きぬ嘆きを描き、中世の評論『無名草子』の中で「『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎては世覚えはべれ」［樋口芳麻呂 他 校注・訳（1999）『無名草子』新編日本古典文学全集 40、小学館、p.220］と、『源氏物語』に次ぐ作品として高く評価されています。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2011年度第2四半期（2011年7月1日から9月30日まで）の実施事業を紹介します。

青少年交流事業

●訪日団

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
韓国高校生（第1団）	金龍満（キム・ヨンマン）漢陽大学校師範大学附属高等学校 校長	54	15	35	9/21～27	高知県立高知西高等学校
韓国高校生（第2団）	李仁遠（イ・インウォン）銅雀高等学校 校長	54	19	31	9/21～27	鹿児島第一高等学校

*1 引率含む　*2 生徒のみ

龍谷大学での学生交流
（韓国大学生訪日研修団第1団）

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生（第1団）	崔尚鎮（チェ・サンジン）慶熙大学校文科大学国語国文学科 教授	29	10	19	9/27～10/6	明治学院大学 龍谷大学
韓国大学生（第2団）	李永雨（イ・ヨンウ）国立国際教育院国際交流部 行政事務官	29	10	19	9/27～10/6	立教大学 香川大学

キムチ作りに挑戦
（新潟県中学生訪韓研修団）

●訪韓団

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
新潟県中学生	竹内正文 新潟県立佐渡中等教育学校 校長	52	14	35	9/18～24	華渓中学校（ソウル）

*1 引率含む　*2 生徒のみ

若手マスコミ関係者招聘事業

宮城県仙台市で開かれた東北六魂祭をはじめ、東北3県のお祭りや東京で開催された「日韓交流おまつり2011 in Tokyo」の取材のため、韓国の若手マスコミ関係者を招聘しました。20名の記者がそれぞれのお祭りを取材し、また東日本大震災の被災地を訪れ、被害状況や復興に取り組む様子も取材しました。

期間	お祭り	招聘人数
7月15日（金）～18日（月）	東北六魂祭	5名
8月3日（水）～7日（日）	盛岡さんさ踊り、秋田竿灯祭り、青森ねぶた祭り	8名
9月28日（水）～10月3日（月）	日韓交流おまつり2011 in Tokyo	7名

東北六魂祭の参加者にインタビューする記者たち

「日韓交流おまつり2011 in Seoul」関連事業

9月25日（日）にソウル市内で行われた「日韓交流おまつり2011 in Seoul」出演団体に対する支援や、広報ブースを出展する自治体を対象とした参加のための支援を行いました。

盛岡さんさ踊り

●広報ブース出展支援（自治体対象）

札幌市、仙台市、静岡県、藤枝市（静岡県）

●出演団体支援

チアリーディング（光星学院高等学校／青森県）

盛岡さんさ踊り（盛岡さんさ踊り実行委員会／岩手県）

仙臺すずめ踊り（仙臺すずめ踊り連盟／宮城県）

フラ＆ポリネシアンダンスショー
（スパリゾートハワイアンズ／福島県）

「ミス日本」ミスきものおよび「ミスコリア」日本代表参加

「日韓高校生交流キャンプ（派遣）」「日韓学生未来会議」

（社）日韓経済協会への委託事業である「第17回日韓高校生交流キャンプ」が8月2日から4泊5日間、ソウルで開催されました。日韓両国の96名の高校生が、日韓混成の10チームに分かれて事業企画を立案し、発表会や交流プログラムを通じて交流を深めました。

同じく（社）日韓経済協会への委託事業であり、日韓高校生交流キャンプOBの大学生・高校生が参加する「第6回日韓学生未来会議」も、8月8日から4泊5日の日程でソウルで開催され、両国合わせて36名の参加者が、「歴史教育」をテーマとしたチーム発表とディスカッション、文化体験などを行いました。

チームで立案した「Ambulance Hospital Connecting System」事業のプレゼンテーションを行う様子（日韓高校生交流キャンプ）

理工系大学院生支援事業

（財）日韓産業技術協力財団への委託事業である派遣プログラム「理工系大学院生研究交流事業　Summer Institute」が、7月26日から9月10日まで韓国で行われました。この事業は日韓双方が理工系大学院生を派遣し、大学・公的研究機関で研究研修を行うものです。今回の派遣プログラムには4名の日本の大学院生が参加し、韓国語と文化に関する研修を受けた後、受け入れ先の研究所で研究研修を行いました。

2012年度　公募プログラム案内

人物交流助成および学術定期刊行物出版の募集要項・申請書は当基金ウェブサイトhttp://www.jkcf.or.jpからダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

人物交流助成

2012年度（2012年4月～2013年3月）実施事業に対する人物交流助成の申請を、2012年1月4日から1月27日まで受け付けます。

学術定期刊行物出版助成

2012年度（2012年4月～2013年2月）の学術定期刊行物助成の申請を、2012年1月16日から1月27日まで受け付けます。

人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。

維持会員

2011年7月1日～9月30日の期間に、特別会員2名、個人会員22名の方に維持会員制度にご加入いただき、38万円の会費収入となりました。
皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）。

［特別］

阿部孝哉　内田富夫（2）

［個人］

秋鹿敏雄	李炯喆	宇野治	大竹洋子
生越直樹	梶谷崇	加藤章	喜多恵美子
熊野清貴	小林和美	小針進	柴公也
清水信行	月脚達彦	中山隆夫	平田辰一郎
福原裕二	藤原祥二	三谷太一郎	尹明憲
渡邊武	和田とも美（2）		

訂正とお詫び

「日韓文化交流基金NEWS　第59号」第1頁におきまして、名称の誤表記がありました。
誤）静岡県立大学グローバル・スタディー研究センター
↓
正）静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター
訂正してお詫び申し上げます。

事務所移転のお知らせ

当基金は、虎ノ門ワイコービル3階から4階に移転し、10月3日から新事務所での業務を開始いたしました。

●新事務所
〒105－0001
東京都港区虎ノ門5-12-1 虎ノ門ワイコービル4階
電話 03-5472-4323　FAX 03-5472-4326
（電話・FAXともに変更ございません）